

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

夏の大会で、ぼくはベンチにいた。背番号は十八。一年生でただ一人、ベンチ入りできたのはうれしかったが、出番がないことは、最初から分かっていた。ぼくの仕事は、スコアブックをつけることだった。スコアブックは、試合の全部を記号で書く帳面だ。誰が打って、どこに飛んで、何が起きたか。一球ごとに、小さなますに書きこんでいく。三年生の先輩は「頼んだぞ」とだけ言って、グラウンドへ出ていった。

三回の裏、先輩がヒットを打った。ベンチが沸いた。ぼくは立ち上がりかけて、座り直した。書かなければならない。まずに、記号を書いた。ペンを持つ手が、少し震えていた。

試合は負けた。三年生は、その日で引退だった。片づけのあと、キャプテンの先輩がぼくのところへ来て、スコアブックを開いた。

「これ、おれのヒットか。」
「はい。」

先輩はしばらく、そのますを見ていた。それから、「お前が書いてなかったら、このヒットは残らなかったな」と言った。ぼくは何と答えていいか分からず、「はい」とだけ言った。

家に帰って、ぼくはスコアブックをもう一度開いた。汗でにじんだ記号が、ページのはしからはしまで並んでいる。試合に出なかった自分が、この試合のどこにもいないような気がしていた。でも、違った。ますの一つ一つに、ぼくがいた。

ぼくは、来年の夏を思った。来年は、グラウンドに立ちたい。そのときは、誰かがこの帳面を持って、ベンチにいる。ぼくのヒットを、その誰かが書く。

スコアブックを閉じて、ぼくは机の引き出しの、いちばん上にしまった。

(この問題のための書き下ろし)

問一 「ぼくは立ち上がりかけて、座り直した」とありますが、座り直した理由を本文中から十字以内で抜き出しなさい。

書
か
な
け
れ
ば
な
ら
な
い

問二 「ペンを持つ手が、少し震えていた」とありますが、その理由として最も適切なものを、次のア～エから一つ選びなさい。

ア 記号の書き方を忘れて、あせっていたから。

イ 先輩のヒットに気持ちが高ぶり、その興奮がまだ残っていたから。

ウ 試合に出られないことがぐちゃぐちゃと、泣きそうだったから。

エ ベンチが寒くて、手がかじかんでいたから。

イ

問三 先輩の言葉を聞く前、「ぼく」は自分をどのように感じていましたか。「」のような気がしていた」につながるように、本文中から二十五字以内で抜き出しなさい。

も
試
合
に
出
な
か
っ
た
自
分
が
、
こ
の
試
合
の
ど
こ
に

問四 「ますの一つ一つに、ぼくがいた」とありますが、これはどういうことですか。先輩の言葉をふまえて、五十字以内で説明しなさい。

試	合	に	は	出	な	か	っ	た	が	、	一	球	ご	と	に	記	録	を	書	
っ	て	こ	と	で	、	自	分	も	こ	の	試	合	の	球	部	と	し	て	関	わ
い	た	と	い	う	こ	と	。													

問五 「机の引き出しの、いちばん上にしまった」という最後の一文から読み取れる「ぼく」の気持ちとして最も適切なものを、次のア～エから一つ選びなさい。

ア スコアブックをもう見たくないので、目につかない所にしまった。

イ スコアブックを大切なものとして扱い、来年への気持ちと一緒にしまった。

ウ 引き出しがいっぱいで、上にしか入らなかった。

エ 先輩に返すのを忘れないように、目立つ所に置いた。

イ

【中I】国語 文章問題 物語文 5 答えと解説

問一（二十点） 答え：書かなければならない

解説：直後の「書かなければならない」が根拠。喜びたい気持ちより、自分の仕事を優先している。

問二（二十点） 答え：イ

解説：直前の「ベンチが沸いた。ぼくは立ち上がりかけて」から、ぼくも先輩のヒットに沸いていたことが分かる。夏の大会なのでエは合わない。

問三（二十点） 答え：試合に出なかった自分が、この試合のどこにもいない

解説：第七段落の「試合に出なかった自分が、この試合のどこにもいないような気がしていた」が根拠。

問四（二十点） 答えの例：試合には出なかったが、一球ごとに記録を書くことで、自分もこの試合の一部として関わっていたということ。

解説：先輩の「お前が書いてなかったら、このヒットは残らなかったな」が根拠。記録があるから試合が残る、その記録を書いたのは自分だという気づき。

採点のポイント：① 試合には出ていない（が） ② 記録を書くことで試合に関わっていた・試合の一部だった（二つそろって満点、一つなら半分）

問五（二十点） 答え：イ

解説：直前の段落で「来年の夏」を思い、自分のヒットを誰かが書く未来を想像している。「いちばん上」は、すぐ手に取れる大切な場所。アなら奥にしまう。